

がつがくいんふくいんか だい か
3月学院福音化、第1課

か 1課 ヤコブとイスラエル (創世記32:28)

がつがくいんふくいんか だい か そ う せ い き し ょ う せ つ よ
3月学院福音化第1課ヤコブとイスラエルです。創世記32章28節を読みます。

ひと い な よ
その人は言った。「あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。あなたが神と、ま
た人と戦って、勝ったからだ。

なまえ か
ヤコブという名前がイスラエルに変わるようになります。ヤコブという
なまえ いみ そ う せ い き し ょ う もの いみ
名前の意味は創世記25章にあります。「かかとをつかむ者」という意味
なまえ かみさま きそ かみさま たたか
です。そして、イスラエルという名前は、神様と競う、神様と戦う、
このような意味です。名前のその意味が大きく重要なのではありません。その名前を通して、
かみさま なに わたし あら み
神様が何を私たちに現わそうとしてくださっているのかを見ることができなければなりません。

なまえ わ みな し ないよう つね
まず、ヤコブという名前で分かるように（皆さんよく知っている内容でしょうが）ヤコブは常に
じぶんじしん ほか ひとびと もの い あに ちち
自分自身だけのために他の人々をだます者として生きていました。兄もだまし、父もだまして、
おじ おじ おお ざいさん りえき え あに
叔父もだました。そして、叔父をだまして多くの財産、また、利益を得たり、兄のエサウから
にものいっぽい ちょうどし けんり うば ちち しゆくふく う
は煮物一杯で長子の権利を奪うことによって、父からすべての祝福を受けました。

たいいない ないよう いちどみ
ヤコブが胎内にいたときの内容を一度見てみましょう。

そ う せ い き し ょ う せ つ
創世記25章23節から26節

しゅ かのじよ い ふた くに たいいない ふた こくみん わ
23 すると主は彼女に言われた。「二つの国があなたの胎内にあり、二つの国民があなたから分かれ
で ひと こくみん ひと こくみん つよ あに おとうと つか
出る。一つの国民は、もう一つの国民より強く、兄が弟に仕える。」

つきひ み しゅっさん とき み ふたご たいいない
24 月日が満ちて出産の時になった。すると見よ、双子が胎内にいた。

さいしょ で き こ あか ぜんしんけごろも かれ かれ な
25 最初に出て来た子は、赤くて、全身毛衣のようであった。それで、彼らはその子をエサウと名
づけた。

あと おとうと で き て ふたご こ ふたご こ ふたご こ
26 その後で弟が出て来たが、その手はエサウのかかとをつかんでいた。それで、その子はヤコ
ブと名づけられた。イサクは、彼らを生んだとき、六十歳であった。

たいいない ふたご たたか ふたご こ ふたご こ ふたご こ
胎内からこの双子がずっと戦ったのです。イサクとリベカが、これはどうしたら良いかと祈った
ところ、神様のみことばが語られました。そこで、胎内にいる二人の子どもが二つの国で、二つの
こくみん い あに おとうと つか い
国民となると言われ、兄が弟に仕えると言われました。

びと てがみ きろく ないよう
これについてローマ人への手紙でパウロが記録した内容があります。

・ヤコブ

かかとをつかむ者

・イスラエル

かみ きそ かみ たたか
神と競う、神と戦う

ローマ9章10節から13節です。

10 それだけではありません。一人の人、すなわち私たちの父イサクによって身ごもったリベカの
ばあい 場合もそうです。

11 その子どもたちがまだ生まれもせず、善も悪も行わないうちに、選びによる神のご計画が、

12 行いによるのではなく、召してくださる方によって進められるために、「兄が弟に仕える」と彼女に告げられました。

13 「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」と書かれているとおりです。

パウロは神様がエサウではなく、ヤコブを選んだ理由をこのように説明をしているのですが、彼らが生まれる前にすでに「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」とこのように表現をしています。このような神様の選択は、人間の行きがあるか、ないかで変わるものではないということを言っています。完全に神様のみこころと計画によってなるということです。

13節に「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」この「愛し…憎んだ」というのは過去形です。それで、すでに生まれる前に、創造の前、永遠の前に、そのように選択したということを言われているのです。このヤコブとエサウの話は、結局、神様の民と神様の民でない者の選択と召しがどういうことかを説明するためのものです。

パウロがローマ人への手紙でこれを引用したのは、マラキ書にあった内容を引用したのです。

マラキ書1章1節から3節を見ましょう。

01 宣告。マラキを通してイスラエルに臨んだ主のことば。

02 「わたしはあなたがたを愛している。——主は言われる——しかし、あなたがたは言う。『どのように、あなたは私たちを愛してくださったのですか』と。エサウはヤコブの兄ではなかったか。——主のことば——しかし、わたしはヤコブを愛した。

03 わたしはエサウを憎み、彼の山を荒れ果てた地とし、彼の相続地を荒野のジャッカルのものとした。

ヤコブを愛して選ばれた、エサウは憎んだと言われます。この話を今、だれに言われておられるのでしょうか。「イスラエルに」と言われています。ヤコブ、すなわち、イスラエル、神様の選択によって愛を受けた者に今語っておられるのです。しかし、イスラエルは何と言うでしょうか。「神様が私たちを愛されたのが、どのように現れましたか」と反問しています。その話を、エサウとヤコブを対照して話ををしておられるのです。

1節から3節までは、ヤコブとエサウとに対する話ですが、4節、5節には、エドムとイスラエル民族に分けて話をされています。

マラキ 1:4-5

04 たとえエドムが、『私たちは打ち砕かれたが、廃墟を建て直そう』と言っても、——万軍の主はこう言われる——彼らが建てても、わたしが壊す。彼らは悪の領地と呼ばれ、主がとこしえに憤りを向ける民と呼ばれる。

05 あなたがたの目はこれを見る。そして、あなたがたは言う。『主は、イスラエルの地境を越えて、なお大いなる方だ』と。』

1節から3節でヤコブとイスラエルの選択と愛と憎むこととしたのを、4節から5節では、エドムとイスラエルという国で表現をしながら、選択と遺棄として分けて語っておられます。

ですから、ヤコブからイスラエルに名前が変わったことは、それほど大きな意味はなく、神様がなぜヤコブ、イスラエルを選ばれたかに対して、焦点を合わせるべきでしょう。すでに創造前に神様が愛して選ばれた神様の民がいるということでしょう。その民のことをイスラエル、ヤコブだと表現をしているだけなのです。

私たちがしたことは何もありませんが、事実、ヤコブはいつもだます者でした。肉的に、人間に見れば、兄のエサウのほうがはるかに立派な人物でした。男らしくて、親のことばもよく聞く親孝行な者でした。ヤコブはどうだったでしょうか。いつも、うそばかり言っていて、だましました。しかし、そのようなことは重要なだけでなく、どんな人間の行いや努力、熱心さ、外見的なこと、人格、性格、こういうものと関係なく、神様が神様のみこころによって選択された者は愛を受けるようになるのです。

今日読んだ32章以降を見れば、ヤコブが自分の以外のことを考へない、自己中心的な内容がさらにたくさん出てきます。20年間、叔父の家にいて、妻も4人もいて、それから財産といろいろな多くのことを得て持つて出で来ます。子どもも11人もできましたし、いろいろな財産を得て羊、牛、家畜、そういうものを連れて出るようになりました。ところが、兄に会いに行くのが恐ろしいのです。兄に殺されるかと思つて。それゆえ、自分の財産と家族を二つに分けて、別々に送るようになります。もしかしたら、先に送った財産と家族がなくなつても、残りはどうにか逃れるだろうという考えだったのでしょう。そして、すべてを送つてヤボク川の渡し場で一人で残るようになります。そして、一人で残つたとき、御使いが現れて格闘する、そのような場面が出て来るでしょう。その場面を、私たちが最後まで神様に願つて、祈つてすれば、神様が聞き入れられるというように理解してはなりません。「自分ひとり生き延びようと、最後まであがいている」そのような姿として見るべきです。結局は、私、自分中心です。

ところで、それが他の人々でなく、それこそ、私と皆さん、私たちだということです。私がいのちを生かそうと、私の利益を得ようと、神様にまで挑もうという、そのような私たちの悪い性格を見ることができるのでしよう。そこでは、格闘に勝ったという形に表現されていますが、神様が負けてくださったのでしよう。あわれだから。神様が大目に見てくださったのでしよう。

このように、ヤコブ、イスラエルの名前の意味するところが重要なだけでなく、ほんとうに大したことがない者、神様とも戦ってみようと善惡の知識の実を食べたアダムのように企てる人間である不可能な私たちを、神様が「みこころの良しとするところにしたがって」選んで神の子どもとしてくださった、その救いに焦点を合わせて考えるように願います。

エペソ1章4節から5節に、このように記録されています。

04 すなわち神は、世界の基が据えられる前から、この方にあって私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされたのです。

05 神は、みこころの良しとするところにしたがって、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。

働き人メッセージでも言わっていましたが、すべての人間が罪人であり、原罪によって神様を離れた者です。すでに死んでいる者で、その死の日を待っている者です。みな滅亡を至るしかない人間であるのにもかかわらず、ある群れに、ただ価なしに神様の愛が与えられるのです。それを私たちの側から、神様が公平だ、不公平だ、そのように見ることはできないでしよう。エペソ1章5節で言われているように、「みこころの良しとするところにしたがって」神様自ら、そのように選択されたと言わっています。前に見たローマ9章11節でも「選びによる神のご計画」と言われています。そのように、ヤコブを愛されて、選ばれたのです。

ヤコブとイスラエルという名前を通して、その中に入っている私を見るべきですし、そういう私に神様のどんな愛が注がれていて、神様の選ばれた民になったのか、私たちはそこに感謝すべきでしょう。救いも恵みで与えられたことですから、私たちが私たち自らを自慢することは何もありません。

最後にエペソ2章8節から9節を結論として読んで終えます。

08 この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。それはあなたがたから出たことではなく、神の賜物です。

09 行いによるのではありません。だれも誇ることのないためです。

もう一度、最後に言います。

ヤコブを通して、そして、イスラエルを通して、私がどのように神様の選ばれた民族になったのか、どのように靈的なイスラエルとして生まれ変わることになったのか、どのように私のような者が救われようになったのか、その神様の愛を悟ることができますように。
神様に申し訳ないですが、常に私の救いが、神様のみこころの良しとするところにしたがって与えられたことを知って、神の国を望み、そして、味わって生きるようになることを願います。